

自治体などの生涯学習や講演の担当者を招いての講演会「NPOシニア大楽 人気講師 15 人のショート講演」(一人約8分)の際の原稿です。パワーポイントを使い写真や標語を紹介しながらでしたが、この紙面にはその代表的なものだけを載せています。

## 世界名作の舞台を訪ねて

セルバンテスとシェイクスピア  
の作品から

Don Quijote de Tokio 清水 武

### タイトル

#### 没後 400 年のセルバンテスとシェイクスピア

私は定年になると南スペインのマラガ大学に留学しました。そのとき「ドン・キホーテ」の舞台・ラ・マンチャを訪れたことがきっかけとなり、「風と共に去りぬ」「赤毛のアン」「ロミオとジュリエット」など 10 年間で計 15 作品の舞台を訪ねてきました。

一昨年はセルバンテスとシェイクスピアの世界的文豪二人の没後 400 年という節目でした。

よく、セルバンテスはスペイン文学の原点、シェイクスピアは英文学の原点と言われています。

最初にセルバンテスの『ドン・キホーテ』から：

「ドン・キホーテ」



スペイン地図の説明 (マドリッド、アルカラ・デ・エナーレス、ラ・マンチャ平原、エル・トボソ、マラガ)



留学の時の写真です。

- ① マラガ大学の留学生向け校舎の入り口付近
- ② リラックスした教室の授業風景。世界からの留学生200人ほどの中で私は最年長でした。
- ③ 地中海の朝焼けです。

## セルバンテスの生家



マドリッド・スペイン広場



- ① アルカラ市にあるセルバンテスの生家の前のドン・キホーテとサンチョ・パンサと。
- ② スペイン広場。ドン・キホーテとサンチョ・パンサの後方上に座り二人を見守っているのが作者のセルバンテスです。

小説『ドン・キホーテ』でもっとも有名なくだりは、主人公のドン・キホーテが遠くに見える風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ場面でしょう。



- ① ラ・マンチャの平原。ブドウの切り株が続いています。
- ② 風車は今は回っていません。かつて粉ひきに活用されていたものが現在は観光用となっています。

## 二人の間の会話や諺

ミュージカル「ラ・マンチャの男」でドン・キホーテがつぶやいています。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ、本当の狂気とは。

夢に溺れて現実を見ないのも狂気かもしれぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。

だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いを付けて、あるべき姿のために戦わないことだ」

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かもしれぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いを付けて、あるべき姿のために戦わないことだ」——

——夢を持つことの大切さ。また、周囲を気にして自分の信念の道を進まない生き方を鋭く突いています。



① ㊤「ドン・キホーテ」博物館の館長にインタビュー。 ㊦エル・トボソ村の女性村長。スペインでは女性の活躍が目立ちますね。

② このときの紀行文は郷里の信濃毎日新聞に5回にわたり連載され、それはまたセルバンテスの生まれたスペインのアルカラ市の新聞にもスペイン語で掲載されました。紙面の上部には「インタビュー『タケシ・シミズ：日本語を話すドン・キホーテ』とあり、タイトルは『日本も多くのドン・キホーテが必要になってくるかも』となっています。紙面の真ん中にある日本語の部分は、信濃毎日新聞の連載の第1回目です。

私の“見果てぬ夢”の一端が実現した旅となったのでした。

滞在していたマンションにクラス仲間を招待し日本食を作って交流したとき。ドイツ、アメリカ、エストニア、イギリス、イタリア、スウェーデン、スイス、それに私と家内ですね。



## 「ハムレット」



デンマークの地図 コペンハーゲンの港

デンマークの首都コペンハーゲンから列車で北に 50 分、『ハムレット』の舞台となったお城を訪ねました。父王を叔父に殺された王子ハムレットの復讐劇の舞台です。



### ① クロンボー城の城壁



② 入口付近にはデンマークの国旗が高く風になびいていました。

③ 城の真ん中は広い庭になっています。この石畳を舞台に、夏には野外劇「ハムレット」が上演されるといいます。

私はまずハムレットが父王の亡霊を見たという塔の上に立ちました。

- ① 小説では寒く、暗く、不気味な荒々しい冬の城のイメージで描かれていますが、初夏のスカンジナビアの空は青く澄み、海を挟んですぐ向こうにはスウェーデンが見えました。



小説の中でとりわけ人口に膾炙している言葉は、第三幕第一場に出てくる”To be or not to be, that is the question!” でしょう。

### To be or not to be, that is the question!

現在、最も受け入れられている訳は、「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か」）それが問題だ」だと思います。舞台の現場を訪れた自分としては次のように訳してみました。

## To be or not to be, that is the question!

生きるべきか、死ぬべきか  
(生か死か)それが問題だ。

「何が真実なのか、何が真実でないのか、それを究めるのが最重要課題である」。

これは、正義と真実を求めて懊悩するハムレットの生命からの叫びなのです。そしてこの重い言葉は、今を生きる私たちにも、人生のあるべき生き方とは何なのか、根本的な問いを投げかけているような気がするのです。

名訳中の名(迷)訳が出てきた？

こんなくそまじめな解釈を試してみた自分ですが、ネット上で、これこそ名訳中の名(迷)訳かも、と思われる訳にぶつかりました。

それは大阪弁による日本語訳です。

” To be or not to be, that is the question!”

— やったろか〜、あかんか〜、ほな〜、どないしょ〜。 —

これは、まさに紛れもない名訳です。復讐を誓うハムレットの悩みの中の心を、非常によく表現できています。

皆さまだったらどう訳されますでしょうか？ 一日翻訳者になって悩んでみるのも楽しいかもしれませんね。

デンマークはアンデルセンを生んだ国。博物館前で「写真を撮って！」と呼びかけてきた可愛い女子高校生たちです。



To be or not to be,  
that is the question!

やったろか  
あかんか  
ほな  
どないしょ